

巻 頭 言

熊本大学先端科学研究部

山田 裕史

タイトルは必要ないそうだが、敢えてつけるとすれば「コロナに屈した復興の学会」となる。2020年度秋季総合分科会、いわゆる秋の学会は熊本大学で開催予定であった。2017年の6月下旬に小菌理事長（当時）から教室主任たる私に突然「2016年の熊本地震からの復興をアピールすべく学会を開催できませんか？」というメールが届いたのが事の発端である。早速何人かの同僚教授に相談し、最終的には教室会議で「受け入れる」旨を決定した。2005年の岡山大学での秋の学会において実行委員長を勤めた経験のある私が、一番の年寄りということもあり、大会委員長に推された。大会委員長はお飾りであり、実質的には実行委員長の原岡教授が指揮を執るという事で、7月半ばに理事長に「引き受ける」と連絡した。9月の山形での学会ではたまたま同じホテルに宿泊していた小菌理事長から朝食時に丁重にお礼されたのを覚えている。

熊本大学は例えば岡山大学に比べていささか規模が小さい。大きな教室はそれほど多くないので会場の確保には若干の苦労があった。思えば2005年の岡山のときは教養棟が改修中で使用できず、やむなく法学部、文学部、経済学部等の建物を使ったのだった。今回は教養棟のほとんどすべての教室を仮予約した。当該年度にならないと教室予約はできないと言われたが、「そこをなんとか」と数学女性事務員のスマイルで乗り切った。ただし2020年はオリンピックイヤーであり、開催中は全国から学生ボランティアを募る、とかいうアイデアも出ていた。ボランティアで授業を休んだ学生に対しては9月に補講を行う可能性もあり、教室が本当に学会で使えるかどうかについては不安もあった。また総合講演についてはその規模の会場がないので、2020年9月にオープン予定の「熊本城ホール」を借りることにした。これは原岡氏のアイデアである。復興をアピールするには最適なホールであろうと誰もが納得できるものだ。大学からは少し離れたところにあるので移動のためのバスも必要かと考えた。山形の学会では駅から大学までバスの臨時便がたくさん出ていたのを思い出す。学長の肝いりだったと聞く。

原岡氏は各教員に対して会計担当、学生アルバイト担当などの役割分担を決めていった。私は市民講演会に関することを任された、開催校推薦の講演者を熊本にゆかりの上野健爾氏にお願いしたところ、「塵劫記」について熊本大学永青文庫研究センターの後藤典子氏との共同発表ということでお引き受け下さったので安堵した。数学会推薦の講演者は東京理科大学の若山正人氏である。

準備は万端であった。2020年春の日大での学会が現地開催中止になったときも、よもや秋の学会にまで波及するとは思わなかった。私はのんびり構えていたのだが、数学会の決断は早かった。秋の学会の前日に予定されていた「日韓数学会合同会議」の延期がアナウンスされたのが4月27日。秋季総合分科会の現地開催を取りやめ、オンラインにする旨の理事長通達が5月23日であった。開催校側の意見や準備状況を聞かずに決定されたことに若干、不快感を覚えたが、今考えれば我々の様子を聞いたところで判断は変わらなかっただろう。理事会の勇氣ある決定に敬意を表す。

市民講演会については少し行き違いがあった。どのような形で開催するのかわからなかった私は数学会広報委員長に問い合わせた。6月6日の理事会で話し合われるとのことであったが、結局、「中止」の連絡は6月23日の理事長からのメールを待つことになる。私自身は6月16日に数学会のホームページで中止を知った。Zoomの機能上、不特定多数の聴衆に対する市民講演会は実施が困難であろう。理事会もさぞかし苦慮したであろうことが想像される。

すべてのイベントの現地開催がなくなったことにより、残された仕事は会場予約のキャンセルだけである。いささかの喪失感は否定できない。

学会初日の9月22日、恒例の評議員会にオブザーバーとして参加した。その席上、寺杣理事長は「今回はオンラインではあったが熊本大学での開催である」という宣言をして下さった。その気持ちが嬉しい。ろくすっぽ仕事はしなかったが大会委員長として私の名前は残るのであろう。名誉欲の塊にはこれに勝る喜びはない。ちなみに日本物理学会（物性）も熊本での開催予定であり、準備が進められていたが、これもオンライン開催に決まった。ホームページを見ると「オンライン開催」としか書かれておらず、開催校なしとしたことがうかがえる。

結果的にオンライン学会はおおむね成功したと言ってよいだろう。数学会の尽力には改めて謝意を表す。今回、巻頭言を引き受けたときには「せっかく準備したのに」という不平不満をぶつけるつもりでいたのだが、そんな気持ちは最早なくなっている。

今や学会のみならず研究会や講義もオンライン、オンデマンドが主流である。新しい機能を生かした遠隔授業は大学のこれからを象徴しているのかも知れない。しかしもとより数学の講演、講義は事実を伝えるだけでなく、Zoomでは届かない「学問のココロ」を伝えるものである。いまだき「聲咳に接する」などというのは、はやらないかも知れないが、これこそが大学のレゾナートルだと信ずる。一刻も早く「チョークと黒板を用いた対面」に戻すべく努力しなければならないと思うこのごろである。